

Photo: 前澤 秀登

# 中村 蓉

『ジゼル』

Nakamura Yo

*GISELLE*

2022.9.17 Sat - 19 Mon

愛知県芸術劇場 小ホール

Mini Theater, Aichi Prefectural Art Theater



**STILL ALIVE**  
国際芸術祭  
あいち2022

## 『ジゼル』愛知公演に寄せて

中村 蓉

2021年6月10日

2019年、私と『ジゼル』の長い付き合いは始まりました。その年の秋に『ジゼル短篇』を発表。翌年2020年の春に予定していた長編『ジゼル』の上演は感染症の影響で中止となり、配信公演を経て、2021年6月ようやく舞台上で完成版『ジゼル』を踊ることが出来ました。今年2022年の2月には山形で再演し、現在に至るまで変容しつつけている作品です。創作当初、ロクでもない男アルブレヒトに引っかけってしまったジゼルの自嘲と鬱憤を盛大に描くことを考えていました。けれども2020年に始まった、当たり前にあった人・物・出来事が唐突に姿を消す現実の日々の中で、物語の焦点は<アルブレヒトの中で生き続けるジゼル>そして<その先を生きるアルブレヒト>に移っていきました。

ふと周囲を見渡すと、<ジゼルにまつわる事象>はあらゆる場所に潜んでいました。テレビのコント番組や、洋楽ポップスのヒットチャートの中。そして<ジゼルの愛>について、私に手触りと実感をもたらしたのは英国女流作家ヴァージニア・ウルフが綴る言葉たちです。彼女が、コートポケットに石を詰めて家の近くに流れる川で入水自殺を遂げる前、夫に書き置いた遺書には「私の人生の幸せは全部、あなたがいてくれたから」とあります。

クラシックバレエ『ジゼル』の2幕、死んで妖精となったジゼルとアルブレヒトは再び出会い、共に生きた過去・死が分かつ今・ひとり生きていく未来が混ざった一瞬でも永遠でもない時の中で、ゆっくりと噛み締めるようにパ・ド・ドウを踊りはじめます。「あなたと居た時間は最高に楽しかったのよ」ジゼルはアルブレヒトにそう伝えたかったのかもしれない。『ジゼル』の物語に続きがあるとすれば、死んでもなおジゼルが疑わなかった自分の幸せ、その偽りない輝きが、彼女を亡くし後悔で苦しむアルブレヒトを奮い立たせて励まして、これから先、何度も彼を救うのでしょう。

アルブレヒトにできることは、今を生きること。「私はまだ生きています」と、心の中のジゼルに語りかけ、ジゼルから渡されたバトンを握りしめ走り続けること。その姿は、生まれてから、いや生まれる前から今日に至るまでたくさんのバトンを受け取って、今この舞台に立つ自分自身と重なります。<生きている>とは、途中経過でカッコ悪くて最前線なんだ!と思います。

私の母方の家系は名古屋にゆかりがあります。コテコテの名古屋弁を喋る曾祖母のちょっとひょうきんな人柄は、私が受け取ったバトンのひとつです。この場所で<STILL ALIVE>というテーマのもとに『ジゼル』を踊ること、この上なく光栄です。

私の中にいる<ジゼル>、皆さんの中にある<ジゼル>たちに、今日の踊りが届きますように。

## 中村 蓉とジゼルの<STILL ALIVE>

中瀬 俊介 (映像、ドラマトゥルク)

2021年6月10日

ぼくは映像作家・ドラマトゥルクという役職を名乗っている、舞台映像の人間である。ここ愛知県美術館にも所蔵のある豊橋市出身の日本画家・中村正義は、ぼくの祖父にあたる人物で、愛知には少なからずゆかりがある。そんな人間の挨拶に代えて、中村蓉版『ジゼル』との遍歴をここに記す。

ドラマトゥルクとしての視点から中村蓉を語るなら、彼女の作品は物語であると言えるだろう。作品を紐解き、登場人物に憑依して、他作品の引用を散りばめる。その中村蓉の作風が、ジゼル以後で確実に変わりつつある。一番の変化は、キャラクターを演じなくなったことが挙げられる。つまりそれ以前の、キャラクターを踊ってきた中村蓉の真骨頂が、このジゼルにある。ジゼル、アルブレヒト、ミルタからヴァージニア・ウルフまでを、ひとりで何役も踊りわけて、観客を混乱に誘うのが、この中村蓉版ジゼルだ。

そんなジゼルをやる、と蓉ちゃん（そう呼んでいる）からきいたときは、世界がこのようなパンデミックに襲われるとは思いもしなかった。最初の緊急事態宣言が発令される中、劇場は封鎖され、スタッフも解散。それでも彼女は、アルブレヒトへの想いに取り憑かれたジゼルのように「私はジゼルをやる」と執念のように言ったとか、言わなかったとか。そうやって配信版ジゼル\*は公開された。まだ舞台配信というものが、積極的には行われていなかった頃。誰もが何を決断しているのか手探りだった時期に、彼女は踊ることを決断した。

その姿勢こそが彼女の<STILL ALIVE>である。

あれは、その本番前日だったと思う。「ここまで来たね」とぼくは彼女を労った。配信を経ての生の舞台を、祝った形だ。しかし彼女からの返事は、予想だにしないものだった。「いま、そんなこと振り返ってる余裕ないから」流石、アーティスト。そうだった、彼女はいま目の前のことに全力で、過去を振り返らない。この姿勢こそ、中村蓉だ。とは、流石にこのときのぼくも思わなかった自分があれだけ大切にしていた身近な過去も振り返ることが出来ないほど、余裕がない状況は、作品を届ける姿勢としても良くない。そう思った。

もっとも彼女も、そんなことはわかっていた。後日、彼女から「あのときの科白を思い出すんだよね」と言われた。ジゼルの酒田市公演に挑んでいたときのことだ。あのとき口では余裕がない、と返しつつも。ここまで積み上げてきたジゼルをしっかりと反芻して、彼女はその想いを舞台に乗せていたのだ。

この作品は、さまざまな登場人物が、いまを生きようとする物語だ。死を選んだジゼルも、本当はまだ生きてかったに違いない。だから、あれほど憎かったアルブレヒトを、せめてもの想いで生かした。中村蓉も『ジゼル』という作品を生かしたかった。だから、世界が静止する中で、ひとりそれに抗い踊り続けたのである。たぶん、きっと。中村蓉の『ジゼル』には、そんな彼女の醜くも美しい生き様が内包されている。

\* <https://www.youtube.com/watch?v=qqVIQ8cNlps>



なかせ・しゅんすけ  
1983年東京生まれ。映像作家、ドラマトゥルク。和光大学文学科在学時からコンサートの映像演出や企業広告の仕事始める。2009年より1年間世界を回り、また2012年にも2周目となる世界一周を果たす。2017年にダンスカンパニー Baobabに加入。映像のみならず、ドラマトゥルクとして振付・演出家北尾亘とともに作品の創作に関わる。これまでに岡本優、笠井勲、中村蓉、中屋敷南の振付作品に映像演出で参加。

## <ヴァージニア・ウルフ 『ダロウェイ夫人』より>

Did it matter that she must inevitably cease completely?  
人は必ず朽ち果てる、それは重要なことではない。

she being part of the trees at home; of the house there, ugly, rambling all to bits and pieces as it was  
私はこの家の戸板の一枚であり、使い古された家のがらくた。

here, there, she survived  
ここで、あそこで、私はまだ生きている。

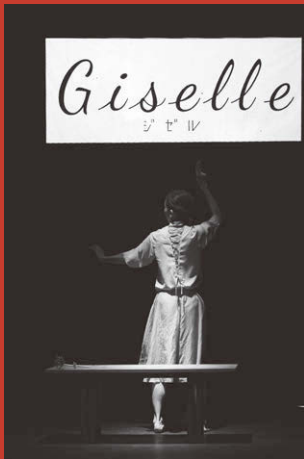
It spread ever so far, her life, herself.  
私は、私の生は、いままでもこれから先も広がっていく。

Dearest, I feel certain that I am going mad again.  
親愛なる人へ、気が狂いそうになる自分を確かに感じています。

## <ヴァージニア・ウルフの遺書より>

I begin to hear voices, and I can't concentrate. So I am doing what seems the best thing to do.  
声が聞こえ始めて、集中できません。だから最善の方法を選びます。

What I want to say is I owe all the happiness of my life to you. V  
私の人生の幸せは全部、あなたがいてくれたから。





# 中村蓉

1988年東京都生まれ  
東京都拠点

2000年代より、本格的に活動を開始。映画や小説の名作を独自の解釈でダンス作品として再構築したのも多く、小津安二郎の映画や松本清張の小説『顔』をもとにした作品でも注目を浴びる気鋭の振付家兼ダンサー。近藤良平、小野寺修二、室伏鴻らの振付アシスタントも務め、室伏鴻振付『墓場で踊られる熱狂的なダンス』等に出演。ヨーロッパやアジアなどでも公演を重ね、近年ではオペラの振付や演出なども精力的に行っている。

今回上演する『ジゼル』は、言わずと知れた古典バレエの代名詞ともいうべき名作を、今を生きるひとりの女性としてのダンス作品へと昇華させようとする意欲的な試み。ジゼルとアルプレヒト、そしてヒラリオンとの複雑な関係を軸に展開する「恋愛、そして生死」をめぐる古典はよく知られているが、中村のそれは、本作に宿るテーマを極私的な解釈で大胆に再構築し、ヴァージニア・ウルフの詩的テキストを引用しつつ、現代人に刺さるソロ・ダンス作品としてユーモラスかつシリアスに踊ってみせる。

## Nakamura Yo

Born 1988 in Tokyo, Japan.  
Based in Tokyo, Japan.

Having started her career in the 2000s, Nakamura Yo is an energetic dancer and choreographer who has earned critical attention with her adaptations of masterpieces from film and literature, such as films by Ozu Yasujiro or Matsumoto Seicho's short-story The Face, into the medium dance. Nakamura has been the assistant choreographer of figures like Kondo Ryohei, Onodera Shuji and Murobushi Ko, in whose Enthusiastic Dance on the Grave she also performed. She has created works throughout Europe and Asia. In recent years, Nakamura has focused her attention on choreography for operas.

Her piece *Giselle*, which will be performed at the Aichi Triennale 2022 is an ambitious attempt to adapt one of the masterpieces of classical ballet into a solo piece about a woman living in the world of today.

Nakamura boldly reconstructs the classic's well-known themes about the complicated relationship of love, life and death unfolding between *Giselle*, Albrecht and Hilarion from a personal perspective and employs dance, quotes of poetic texts by Virginia Woolf, as well as humor and grave seriousness in a solo piece that will resonate deeply with today's audiences.

## 主な作品発表・受賞歴

- 2022 DaBYレジデンスアーティストとして活動
- 2021 二期会ニューウェーブ・オペラ劇場『セルセ』めぐろパーシモンホール大ホール、東京
- 2020 『ジゼル 特別ver.30分版』(映像作品)
- 2019 『理の行方 vol.3 Pendulum』横浜ダンスコレクション青空ダンス、神奈川県
- 2016 第5回エルスール財団新人賞、コンテンポラリーダンス部門受賞
- 2013 横浜ダンスコレクションEX、審査員賞、シビウ国際演劇祭受賞

## Selected Works & Awards

- 2022 Active as DaBY artist in residence
- 2021 *Serse*, Nikikai New Wave Opera Theater, Meguro Persimon Hall, Tokyo, Japan
- 2020 *GISELLE* special 30 min ver. (video)
- 2019 *Pendulum* vol.3, Yokohama Dance Collection Aozora Dance, Kanagawa, Japan
- 2016 5th El Sur Foundation Newcomer Award for Contemporary Dance, Japan
- 2013 Sibiu International Theater Festival Jury Prize, Yokohama Dance Collection EX, Japan

振付・出演：中村蓉

映像・ドラマトゥルク：中瀬俊介  
舞台監督：久保田智也  
照明：久津美太地  
音響：相川貴  
衣裳：田村香織 (HAReGI)  
美術：板倉勇人  
美術協力：石原朋香  
音楽協力：長谷川ミキ  
制作協力：目澤美裕子

サポートダンサー：杉山絵理 (archaiclightbody)

記録映像：株式会社青空  
記録写真：今井隆之

パフォーミングアーツ・アドバイザー：前田圭蔵 (国際芸術祭「あいち2022」)  
制作：菅井一輝 (国際芸術祭「あいち2022」)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会  
共催：愛知県芸術劇場

文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業

国際芸術祭「あいち2022」  
パフォーミングアーツ

アドバイザー：藤井明子、前田圭蔵  
キュレーター：相馬千秋

プロダクションマネージャー：清水翼  
コーディネーター：村松里実、谷口裕子、芝田遥、菅井一輝

テクニカル・コーディネーター：尾崎聡

票券：小森あや (bench Co.)

翻訳：ロバート・ツェツシェ  
編集：鈴木理映子  
デザイン：山口良太

PAチャンネル



詳しくはこちら

各作品の背景についてのレクチャー、参加アーティストによるトークなど、パフォーミングアーツ・プログラムを多面的に体験するためのオンライン・コンテンツです。

Choreographer & Dancer: Nakamura Yo

Videographer & Dramaturg: Nakase Syungsuke  
Stage Manager: Kubota Tomoya  
Lighting Designer: Kutsumi Daichi  
Sound Designer: Aikawa Takashi  
Costume: Tamura Kaori (HAReGI)  
Stage Designer: Itakura Hayato  
Stage Design Support: Ishihara Tomoka  
Music Support: Hasegawa Miki  
Administration: Mezawa Fuyuko

Support Dancer: Sugiyama Eri (archaiclightbody)

Video Documentation: AOZORA, LTD.  
Photography: Imai Takayuki

Performing Arts Adviser: Maeda Keizo (Aichi Triennale 2022)  
Production Coordinator: Sugai Kazuki (Aichi Triennale 2022)

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee  
Co-Presented by Aichi Prefectural Art Theater

AICHI TRIENNALE 2022  
Performing Arts

Adviser: Fujii Akiko, Maeda Keizo  
Curator: Soma Chiaki

Production Manager: Shimizu Tsubasa  
Coordinator: Muramatsu Satomi, Taniguchi Yuko  
Shibata Haruka, Sugai Kazuki  
Technical Coordinator: Ozaki So

Ticket Administration: Comori Aya (bench Co.)

Translation: Robert Zetzsche  
Editor: Suzuki Rieko  
Designer: Yamaguchi Ryota

2022年7月30日|土| — 10月10日|月・祝|[73日間]

芸術監督：片岡 真実 (森美術館館長、国際美術館会議 (CIMAM) 会長)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会  
助成：一般財団法人地域創造  
愛知県政150周年記念事業



AICHI TRIENNALE 2022: STILL ALIVE

July 30 (Saturday) to October 10 (Monday, public holiday), 2022  
Artistic Director: Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum/President, CIMAM)  
Organized by Aichi Triennale Organizing Committee  
Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities